



リレー小説

六人目の魔女だよ

日日日
冬木冬樹
むらさきゆきや
土屋つかさ
ゆずはらとしゆき

本作『六人目の魔女だよ』は、
日日日さんの企画で、

日日日

冬木冬樹

むらさきゆきや

土屋つかさ

ゆずはらとしゆき

という、五人のライトノベル作家が
書き継いだリレー小説です。

第一章（日曜日）

馬車が、深い森のなかを進んでいる。

荷台も含めてすべて鉄あるいは銀でできているから、走るその音もがたごとと騒々しい。重いから、それを引く馬も何だか面倒くさそうだ。

でも仕方ない、これは魔女狩りの馬車だ——たいていの場合、魔女というものは周りの命あるものものを腐らせる。金属の箱にでも閉じこめておかなければ、ありとあらゆるものを汚して殺してしまう。

ふつう、魔女というものはごく当たり前に赤ん坊として生まれる。

たいてい、母胎を腐らせてしまうため——生まれる前に親とともに死んでしまうが、希に強い魔力をもつものは恐るべき生命力で生きのびてしまう。

法律上、生まれたのが魔女と判明した時点で親が処分する決まりだが、誰もが子供は愛おしいし——生まれたばかりの生命を摘みとることに良心の呵責を覚えないものは、あまり多くはない。

我が子ならば尚更で、こっそり保護し育ててしまう場合がままある。

ゆえに魔女というものは一定数、常に周りを腐らせながら存在している。

「だからまあ、私の仕事はなくなる。君たちの仕事もね」

馬のたてがみを撫でてあげながら、そんなふう語りかけてみる。

どうぶつに語りかけるのは我ながら寂しいけれど、無言で移動しているのも暇である。こんな汚れ仕事をしなくちゃいけないお馬さんを、労ってあげたい気持ちもある。

でもまあ、我慢してもらわなくては——家畜というものはそういうものだ、常に有用性を証明しつづけなければ、無用の長物として廃棄される。

そういう意味では、私のような魔女狩りもまた家畜だろうか。

魔女は人間社会にまぎれこんだ害虫だ、それは必ず駆除しなければならない。でも、誰もがやりたがる仕事ではない。基本、陰惨きわまりないし。給料安いし。

毒をもって毒を制す——運良く己の魔力を操ることを覚えた私のような特別な魔女は、政府に雇われ、同胞である魔女を刈りとり始末する魔女狩りとなることでしか、生きのびていくことはできない。

魔女の腐敗のちからは、同じ魔女には及ばない。私が常に己の魔力で守っていなければ、この馬も全身が壊死して倒れる。

危険物の取り扱いは、プロフェッショナルが行うべきだ——いつだって。

「あのう」

生きていくのは大変だねえ、家畜どうし仲良くしようよ、とお馬さん撫で撫でをつづ

けていたら――背後から声をかけられた。

荷台のなかだ。

鉄格子で遮られたちいさな空間、その奥からぎよろぎよろした目を覗かせて、ひとりの女がこちらを見ている。不健康で、ちょっと小突いたら死んじゃいそうだ。

まだ若いだろうに、雰囲気は老婆だ。

憔悴しきっている。

「まだ目的地にはつかないのですか」

ぼそぼそとした声で尋ねられたので、私は「うん」と振り向きもせずに応えた。

「魔女の屍体も残留した魔力で周囲を汚染するからねえ、人里離れたところまで運んでから焼くの。常識でしょう、たいてい鉱物を掘り尽くした廃山とかだね。この森をぬけたらすぐだからさ、ちいと我慢しといてくれるかな」

この森も長くそういった用途、つまり魔女のゴミ捨て場（と呼んでしまえ）までの通り道につくられてるから、すっかり魔力に馴染んで奇形の植物が多い。

人間の顔面みたいな瘤が浮きでた樹木、互いに絡みつき苦悶しているような茂み、紫色の果実――ああもう、悪夢みたい。

「どうだい、おどろおどろしいだろ」

べつに怖がらせる意図もなく、暇潰しの雑談として。

「伝説によると、この森には殺され焼かれまくった魔女たちの怨念が集まった恐ろしい亡霊がでるらしいよ。魔女の亡霊がね、そいつは魔女狩りへの憎悪から運ばれている途中の魔女に取りつき――乗っ取って、再びこの世で活動しようとするらしい」

「ひいいい」

背後の若い女は、面白いぐらいに怯えた。

「ほ、ほんとうに――そんな、恐ろしいことが……？」

「いや、幸いにして私もこの仕事長いけど、そんなお化けとは遭遇したことがないよ」

言ってやると、女は青ざめたまま。

不安そうに。

「あのう、それよりも――どうして、あたしも荷台に載せられているんでしょうか。こ、ここは居心地が悪いです。そちらの、あなたの後ろ――馬に乗せてくれませんか？」

「いやいや」

私はてきとうにあしらった。

「ごめんね、そういう決まりなんだ。魔女は一箇所に集めてたほうが管理しやすいからね、それは他の魔女を密告し魔女狩りに引き渡した、君も例外じゃない。まあ、仲間を裏切った罰とでも思ってくれたらいいよ」

先ほどからうるさい女を、とりあえず裏切りの魔女、と呼称しよう。

名前は覚えてたくない。

できれば顔も見たくないから、振り向きもしない。いや、さすがに顔と名前を知ってる相手を焼いたりすると寝覚めが悪いので、この仕事のときは基本こうしている。

裏切り、としたのは彼女がそのものすばりの行為をしたからだ。

魔女は法律によってその生存を認められていないが、私のように魔女狩りになる以外にも唯一——生きのびる道がある。

仲間の魔女を見つけ、政府に密告して売り払うのである。

そうして同胞を裏切ったものだけが、恩賞として生存をゆるされる。

常に隠れひそむ魔女たちを発見するための、いちばん有用な方法だ。囚人のジレンマだ、立場が弱いものが追いつめられたとき——そいつは、必ず裏切る。

守るべき信念も立場もない魔女にとって、未来を報酬にされたとき、同じ魔女を売り払うにあたっての罪悪感は吹き飛ぶ。

だからまあ、よくあることだ。

この裏切りの魔女の手柄によって、一気に魔女を複数——捕獲できた。この馬車は、そいつらを運ぶための代物である。

荷台のなかには、密告され売られた三人の魔女が、肩を寄せあって震えている。

私も魔女に含めるなら、裏切りの魔女もあわせて——合計で、五人の魔女がこの場にいることになる。

否、あの胡散臭い伝説がほんとうなら——怨念がかたちづくった六人目の魔女が、どっかに潜んでいるのかもしれないけど。

「うう」

唸っている裏切りの魔女の背後から、ぶつぶつと——「呪われろ。裏切りもの、魔女狩りもだ——死ね、地獄の炎で焼かれるがいい」などと恨み言をつぶやいているものがある。

三人の、これから焼かれる魔女のひとりだ。

三人とも名前を覚えるつもりはないが——便宜上、痩せた魔女。太った魔女。ちいさな魔女と呼称しようか。

さっきから怨念を吐き散らしているのは、痩せた魔女だ。

がりがりに細くて、それこそおとぎ話の魔女のようだ。典型的な魔女に見える。つまり、世を拗ねていて憂鬱そうで、常に呪いをまきちらしている。

まあ、気持ちはわかるけど——私も仕事でやってるだけだし、そう怨めしそうに見ないでほしいけどなあ。

「ねえ、毛布か何かありませんか。この子が凍えそうなんです」

ちいさく呼びかけてきたのは、太った魔女だ。

食べ物を腐らせてしまうため、基本的に魔女は病がちで痩せている。でも、この女は何だかぼつちやりしていた。無論、魔女にしては一一である。理由はわからない、体質か何かだろう。まあ、誤差である。

心優しい魔女のようで、そのかたわらに居る一一ちいさな魔女、ほんとに子供の魔女を抱きよせ、こちらに訴えてくる。

「可哀想だとは思わないんですか」

愛しそうに、ちいさな魔女を身体に押しつけてあっためながら一一太った魔女は主張してくる。え～、どうせすぐ死ぬんじゃない……。寒かろうが風邪ひこうが同じじゃん。

その腕のなかで、なかば眠っていたようにか細く震えていたちいさな魔女が。

不意に、目を見開いて。

「何か、聞こえませんか一一」

可愛らしい、鈴が転がるような声でつぶやいた。

よく見ると顔立ちがととのった、うつくしい女の子だった。これから焼かれて消し炭になってしまうのが、すこしもったいないぐらいに。

「歌みたいなのが……」

幻聴でも聞こえているのか、よくわからないことを言っている。

何だか、どいつもこいつも情緒不安定で一一どうにも、面倒くさい道行きになりそうだなあ。などと、私が溜息をついた直後だった。

最初に、痩せた魔女が死んだ。

第二章（冬木冬樹）

† † †

馬車を暗い森の中で止めた。

めんどくさそうに走る馬の手綱を引く。馬車はがたごとと激しく揺れながらしばらく進んで、それからぞんざいに停まった。

鉄の馬車は一度止めるとまた速度に乗るまで大層重いのだろう。馬は不満そうにこちらを振り返った。

ごめんねと笑ってから、馬車を止めた原因へと振り返る。

大騒ぎする、太った魔女へ。

「ねえ！ ねえ！ 大変なんです、この人が——」

「わかった、わかった。話ぐらいい聞いてあげるから」

これから死んじゃう相手の心身のケアをする気はないけれど、さっきから後ろで叫んでいてとてもうるさいのだ。

「この人が、急に静かになって、それで！」

「呼吸と脈拍は確かめた？」

「止まっ、止まってて、それで……」

「あーはいはい。死んじゃったのね」

「死ん……そんな、簡単に！」

太った魔女は、魔女にしては健康な精神をしているようだ。

『凍える子供に毛布を』『人の死亡は大変なこと』……どういう環境で育てばそこまでヒネてない魔女になれるのか、不思議でしようがない。

「ちゃんと、祈りを捧げてあげないと……こんな、こんな最期……」

「説教とか趣味じゃないんだけどさあ……」

これ以上騒がれてもうるさいので。

「これから、君らは捨てられるの。だから、凍えそうだとか、死んでるとか、そういうのはもう、意味ないわけ。どうせ、腐って骨だけになった魔女たちの山に放り込まれて、処分されるんだから。余命一ヶ月の人が二十九日で死んでも、それは誤差でしょ？ だからさ、ちょっと誤差が出たぐらいで、騒がないでもらえるかな？」

「そんな……ひどい……生きてるのに……わたしも、この子も、この人だって……」

「『生きてる』んじゃない。『産まれてしまった』んだよ、私たちは」

「なんでこんな仕打ち……」

「裏切った子に聞くんだね」

「う……」

膝を抱えてちいさくちいさくなって、そのまま消えてしまいそうだった裏切りの魔女が、唸った。

「ただ生きてかっただけなのに……どうして、それすら許されないの……わたしがいたい、なにをしたって言うの」

「だから、『産まれてしまった』んだってば」

「……どうして……どうして……人並みの幸福……温かい家族……おいしい食事……許せない……許せない……みんな、みんな、許せない……」

太った魔女の声は、次第に怨念を帯びていく。

「あ、あのう！ あ、あたしも、あなたの後ろに――」

「ごめんね、そういう決まりだから」

「う、うう……」

裏切りの魔女はがたがたと震えてこちらを見るが――私としては、さっきよりも太った魔女が静かになったので、裏切りの魔女のことはどうでもいい。

恨み言だけが響く、しんと静かな森の中。

手綱を引いて、腹を蹴って、馬を走らせようとしていたら、

「聞こえませんか――」

太った魔女に壊れそうなほど強く抱きしめられ、か細く荒い呼吸を繰り返すちいさな魔女が、不意に。

「歌が。今度こそ、あなたにも聞こえるでしょう？ こんなに大きな歌――」

その時、風が吹いた。

森の木々がざわめきだす。ざわざわと葉を鳴らし、びょうびょうと風が空洞を通りすぎる音。

それだけじゃない。奇形の木々と腐った土と、この世のものとは思えない枝が、揺れ、こすれ、落ちる音は、どこか奇妙で、苦しそうで、痛そうで――悪夢みたいな調べだ。

確かに、情緒が不安定になっていれば、歌に聞こえるかもしれない。

怨念と憎悪の歌。

この世すべてを許さない歌。

「歌が――」

鈴を転がすようなちいさな魔女の声は、寒さか体調不良か、苦しげに震えてはいるけ

れど、次第にそのトーンを上げている。

喜ぶかのように。

それこそ、妙なる調べを歌い上げるかのように――

「……とにかく、目的地まで静かにしてなよ」

それだけ言って、馬の腹を蹴った。

休憩は終わり。あとは道具として目的地まで私たちを運ぶだけ。

重い金属の馬車は動き出しこそにぶいけれど、一度速度にのれば快調にすべる。

「悪いね。帰りはもう少し軽くなってるはずだからさ」

馬のたてがみを撫でる。

汚れ仕事をさせられている馬は、労われていることがわかったのか、平気だとでも言うかのように、速度を上げた。

「歌が」

まだちいさな魔女はそんなことを言っているが、あまりぐずぐずしていたい場所でもない。

太った魔女ほど大きな声でもないし、『歌が』と繰り返すちいさな魔女と、『あたしも馬に』と数分おきに言う裏切りの魔女は放っておくことにして、目的地へ急ぐ。

面倒くさい道行もあと半分ほど。

荷台の魔女たちを山に埋めれば帰りはさびしく馬と語らえるかな、と溜息をついて。

それから。

荷台の死体が増えていることに、気付いた。

† † †

裏切りの魔女が悲鳴をあげる。

「いやあああ！ 出して！ あたし、そっちへ！ 出して！」

「こんどは、なに？」

いいかげん静かにして欲しい。私は静寂を愛するわけではないし、寂しさも理解するけれど、騒々しいのは嫌いだ。

まして、今から焼かれて埋められるような者とは、できるだけ関わりたくない。

「出して！ 出してください！ あたしを檻から出して！ あなたのほうへ座らせて！」

引きつった声だった。

また、面倒なことが起きたのか。

ふたたび馬に休むよう手綱を引いて止め、荷台へと視線を移す。

檻のなかにいるのは――

青ざめた顔して叫ぶ裏切りの魔女。痩せた魔女の死体。そして、太った魔女……の死体を見ている、ちいさな魔女。

太った魔女が死んでいた。

「どういうこと？」

「出して！ あたしを、ここから……!!」

「ああもう、黙れ！」

「ひっ!？」

それほど強い口調ではなかったと思うが、今までのんびり対応してきたから、驚かせただろうか。

まあ、いい。

べつに今から焼かれる魔女に好かれようと嫌われようと、どうでもいいことだ。

それよりも、無視できないことが起きている。

太った魔女は、どうてい目的地に着くまで死なないと思っていた。魔女にしては健康的だったし、さわぐほど体調もよさそうだったし、自害するような様子でもなかった。

明らかに異常な死だ。

こんなとき、魔女の怨念やら憎悪やらを不安に思えば、すこしは可愛げもあるのだろ

うが、生憎とそんなぬるま湯につかった生き方はしていない。

考えられるのは、病気か。

それも、急に悪化するような？

「まずいな……」

こいつらと、どれだけ接触した？ 仲良くする気はなかったが、魔女の魔力が自分には効かないと思っていたから、それほど徹底して避けてはいなかった。

食事を渡したときに手が触れたことは？

ない、とは断言できない。

「くそっ」

あるいは、いっしょにいるだけで感染する可能性は？

裏切りの魔女が、じっと見つめている。

ちいさな魔女が、また遠くを見た。

「歌が……聞こえるでしょう？」

「風でしょ」

そういえば、今日は珍しく風が強い。雨が降るよりはマシと思っていたが……関係あるのかもしれない。

いつそのこと、ここで焼くか？

まだ病気と決まったわけではない。染ると決まったわけでもない。それでも、リスクは小さいほうがよかった。

焼くなら、荷台ごとだ。

馬さえ無事なら帰り道に困ることはないし、荷台だって雇い主がまた用意する。病気だったかもしれない、と言えは持ち帰らなかったことを咎めはしないだろう。

馬と荷台を結ぶロープをほどく。

「あの……えっと……」

裏切りの魔女が、声をかけてきたが、もう返事をする気はなくなっていた。今から、焼き殺す相手と会話したいと思うほど神経は太くないし、壊れてもいない。

馬を荷台から遠ざける。

火に怯えて逃げないように、しっかりと立木に手綱をくくりつけた。

「さて、焼くか」

荷台のほうへ振り返り――

気づきたくもないことに、また気づいた。

六人目の魔女がいる。

第四章（土屋つかさ）

† † †

既にお分かりかと思うが、予定では鉄の馬車の中にいる四人の魔女は、全員この山で死ぬ。

確かに今四人と言った。裏切りの魔女もここで死ぬのだ。

今この世界で、魔女が生き延びる唯一の方法は、私のように魔女狩りになる事だけだ。

他の魔女を政府に密告すれば生き残れるというのは、嘘なのである。

効率良く魔女狩りを進められるよう、国ぐるみで正規の法律まで制定して作り上げたデマなのだ。

デマがばれる心配はない。捕まえた魔女も、裏切りの魔女も、同時に殺されるのだから。

真実を知っているのは、政府の担当部署と、一部の魔女狩りだけ。つまり、私のように捕まえた魔女の最終処分までを請け負っているような、上級職の魔女狩りだけだ。

ちなみに、最終処分のやり方もそんなに大変じゃない。目的地に着いたら、鉄の馬車から馬を切り離して、馬車を外側から燃やすだけだ。しばらく待てば人数分の焼死体が出来上がるので、それを捨てて作業完了。

安い給料に見合った、簡単な仕事。

その筈だった。数刻前までは。

荷台の方を振り返り、鉄格子をしっかりと掴んでいる裏切りの魔女と目を合わせた時、その目に写るある種の力を見た時、気づきたくもないことに、また気づいた。

六人目の魔女がいる。

格子の隙間から覗く青い瞳を強く睨みつけると、瞳の中に更に怯えが広がった。

「な、なんですか？ あの、お願いだから私も馬に――」

「あなた」

裏切りの魔女の言葉を遮り、私は吐き捨てるように言った。

「あなた、身ごもっているのね？」

「!!」

あんなに強く握っていた格子から手を離す。きっと、反射的にお腹を押しえたのだろう。

裏切りの魔女の瞳に写っていた物。それは母親の子を守る強さだった。

ああ、こういう事があるから、死にゆく魔女とは顔を合わせたくないんだよ。

私は忌々しげに言った。

「よくもまあ魔女の分際で男と交わる気になった物ね」

それは本来口にする必要の無い言葉だった。

「相手がどうなるのか、分かっていた筈は無いでしょう？」

しかし、言葉は口をついて出てきた。

「目の前で腐っていく相手を見ながら、それでもなお子種を求めたというの？」

理由は二つ。一つは、この裏切りの魔女が私の望めない物を手に入れたから。

「あなたは生命を犠牲に生命を得た訳だ。さぞかし強い快楽を得られたのでしょうかね」

もう一つは、不安だったから。この仕事についてから殺していた感情にとらわれ始めていたから。

何が起きようとしているのか、おぼろげながらに分かって来た。

本当なら、こんな八つ当たりのような言葉を吐いていないで、とっとと馬車を捨ててここから逃げ出すべきだ。

頭では分かっている。

でも、青い瞳に写る母の力が、私を離してくれない。私の呪われた体を、束縛している。

裏切りの魔女は、怯え、震え、瞳に涙を溜めながら、それでも私に言った。

「でっ、でもっ！ わっ、私達は、愛し合っていたから！」

愛し合っていたから！

ああそうだろうとも！ お前の交わりの相手は、自分の死を理解しながらもお前を愛そうとしたんだから！ でもそれに私を巻き込まないでくれないかな！

「この子には、なんの罪も無いのよ！ だからお願い！ 私をここから出して！」

「残念だけど」

私は言った。

「罪はある」

「何を言っているの!?! だって――!?!」

急に言葉が止まり、青い瞳が、格子の隙間から姿を消した。そして、どさり。

倒れる音。中を見なくても分かる。

裏切りの魔女も、死んだのだ。

「母」が目の前からいなくなり、私の思考能力は瞬時に回復した。

行動に移らなければ。仕事を速やかに実行して山を下りる。あるいは、とっとと馬車を捨ててやっぱり山を下りる。ただし、前者を実行するには強いリスクがあり、後者は私のその後の立場が危うくなるかもしれない。

考えろ。ただし急いで。時間は全然無い。手遅れ一步手前。

「歌が……聞こえる……。本当に……綺麗な……」

小さな魔女が周りの状況を全く理解していないのか、楽しそうに呟いている。

「ああもうあんたは頭がおかしいのか？ それとも現実から逃避しているのか!? どっちにしても羨ましいよ！ 悩まなくてすむんだから！」

いらだたしげに叫ぶ。

私の怒りに呼応するかのよう、森の中を突風が吹き、私の着ているローブを強くはためかせた。いななき暴れる馬を落ち着かせる。

木々が大きく揺れ、隙間を作り、少しだけ空と、遠くの山が見えた。

その時。

「……嘘、でしょ」

私は今日何度目かの気づきを得た。

小さな魔女は、頭がおかしいわけでも、現実から逃避している訳でも無かった。

確かに、それは歌だったのだ。

† † †

確かに、旋律を帯びていたから、歌ではあったのだ。

けども、私の感想は、小さな魔女のそれとは正反対だった。

怨念と憎悪の歌、この世すべてを許さない歌でもなければ、綺麗な歌でもない。

私の知らない言語を羅列し、朗々と詠唱している——むしろ、ひとの歌とはまったく異なる囀りだ。

なのに、小さな魔女は導かれるように歩き出していた。歌うものに向かって一歩、二歩と歩き、わずかに身悶えるとぼたりと倒れた。裏切りの魔女の屍体へ重なるように。

歌の矛先が、残された私へ向けられたのは言うまでもない。

ひとの歌とはまったく異なる囀りと評したのも、この歌がある種の指向性を帯びていることに気づいたからで、より具体的に言えば、もっとも近くにいる生者へ向けられるのだ。

一拍もとぎれることのない歌が無数の蛇のように絡みつき、ひどく不躰に潜り込んでくる。

ありとあらゆる穴を穿ち、犯すように。

「……なんて、淫らで忌まわしい歌……っ！」

私の意識はねっとりとした旋律に翻られ、ぐにやりとねじ曲げられ、薄れていく——。

同じ頃——朱塗りの武装馬車が、魔女狩りの馬車とは反対の方向から、魔女たちの山へ向かっていた。

馬車に乗っていたのは、異端審問官と錬金術師であった。

「相変わらず、不愉快極まりない場所だ」

馬を操っている前者——異端審問官が呟く。

視界に広がる畸形の森を駆けていく馬車に従者はいない。途中で屍体と化したから、捨ててきた。

「私にとっては、興味深い場所ですがね。もっと早く来て、真実を見たかった」

哄笑を交えつつ、後者——錬金術師も呟く。

「もっとも、異端審問官……あんたが捨ててきた街も、今頃は似たようなもんでしょ

うよ」

「ふん……もはやのがれることはできん」

荷台で呟く声に対し、異端審問官は吐き捨てるように答えた。

「わし自身の死、わしが生きてきた世界の死……どちらも避けられぬのなら、せめて、うぬの言う……真実とやらを知りたいのだ」

「だから、私を牢から出したのかね？ 異端の錬金術師である、この私を……」

辺境の地ばかりを征く魔女狩りの馬車は知らなかったが、世界中で一斉に魔女が生まれていた。

否——ある日を境に、すべての赤子が魔女として生まれてきたのだ。

赤子はおぎゃあおぎゃあと泣き喚く代わりに、囀るように歌った。あの忌まわしい旋律——腐敗をもたらす呪いの歌を。

歌を聴いた者は次々と死に、その屍体が更に腐敗を撒き散らした。

辛うじて生き残った者も異形と化し、男たちの大半が餓える怪物と成り果てた。

正気を失った彼らは暴れ、すべてを喰らい尽くし、最終段階——共食いを始めていた

。「「殺し尽くせ！ 喰らい尽くせ！ おれたちに明日なんかあるものか！」」

都市は地獄と化し、政府は機能を失った。

あとは最後の一人になるまで、他者を喰らい続けるだけだ。

「その通りだ。うぬの役割はまず、わしに仮説を述べることだ。異端にまつわる仮説とやらを」

「やれやれ、この期に及んで、やっと耳を傾ける気になりましたか」

錬金術師は滔々と仮説を述べることにした。

これより目的地までの短い道中、他にすることは無い。積み込んだ研究機材を磨くことにも飽きていた。

「魔女が放っていた腐敗のちからとは……流行り病の一種でしょうなア。つまり、あんたらが魔力と呼んで怖れていたのは、変異した菌類……より厳密に言えば、菌類の有り様を歪めた、もっと微小なる生物でありましょう」

歌と共に伝播する腐敗のちからとは、病原体の魔力に蝕まれ、変異した菌類の胞子であった。

「何故……そんなものが生まれたのだ？」

「環境適応と進化、のためでしょうなア。ひとが文明を築くということは、自らの手で生存環境を歪め、汚し続けるということですからなア。汚れた世界に生を受けてしまった赤子たちが、無意識のうちに生存環境の最適化——世界改変まで伴う進化を望んだ

のは、当然のことでありましょう」

生者にとって最適の環境を追い求めた結果——皮肉にも、生存環境は悪化していった。だが、生者の側がその変容に適応することは、もはや困難であった。既に、人間を含めたすべての生物種が進化の臨界点へと達しつつあったからだ。

そして、種としての臨界点に達した瞬間——すべての胎児が突然変異し、新しい魔女と化した。

結局、これまでに現れ、そのたびに狩ってきた数多の魔女たちは、来るべき破局への前触れでしかなかったのだ。

「新しい魔女どもが撒き散らしている魔力は生物のありようを改変し、新しい環境へ適応するよう、変異させる——いわば、神の思し召しというやつですか？」

「うぬは.....あの忌まわしき死の群れと畸形の森を、新しき天地創造と呼ぶのか！」

異端審問官は怒りを込めて叫んだが、錬金術師は静かに頷くだけであった。

魔女の胎内から這い出した新しい魔女は、既にその胎内で魔力を帯びた微小なる病原体を育てていた——赤子の分際で淫らに孕んでいたのだ！

胞子が拡散すれば、病原体もまた拡散していく。そして、囀るように垂れ流される歌は、病原体に感染した者たちの生理機能を操り、細胞変性効果を促す呪文——まったく忌まわしき子守歌であった！

病原体に蝕まれた男たちの脳髄と臓腑は、歌を聴くことで突然変異を起こし、かりそめの死を経て食人鬼へと変貌する。

彼らが食い残した屍体を苗床として、菌類は自己複製を繰り返し、死は無限に広がっていく。

植物群にもさまざまな生理的、形態的な変化が現れる。人間の顔面みたいな瘤が浮きでた樹木、互いに絡みつき苦悶しているような茂み、紫色の果実——狂人の悪夢が具現化したかのような光景は、こうして創り出されていた。

そして、彼らが去った都市もすでに畸形の森と化しつつあった。

「畸形たちはある意味、進化の可能性とも言えるが.....しよせんは、魔女どもに支配される世界の露払いでしかない」

「それでも、わしは征かねばならんのだ！ その仮説が異端であることを神に祈りつつな.....」

「ふむ.....それは、あんたが神に仕える異端審問官だからかね？ あんたが仕えていた狂人の国はとっくにこの世の地獄と成り果てたというのに、ご苦労なことですなア！」

「わしはもう、裁く側ではない。もはや.....裁かれる側だ。もつとも、もう裁く者もいないが.....」

異端審問官はそう呟くと、右のこめかみから流れ続ける血に触れ、呻いた。

頭蓋骨の一部が変異し、皮膚を突き破っていた。

「くくっ、あんたも食人鬼と化すのかね？　だが、私を喰らえば、あんたの望む真実には辿り着けぬぞ！」

嘲り笑う錬金術師を振り返ることなく、異端審問官は馬の手綱を引いた。

もともと容貌魁偉であったが、額から長く鋭い角が生えたその姿は、完全に異形と化していた。

それでも、角の痛みを耐えながら、辛うじてひとであることに踏みとどまっていた――。

やがて、異端審問官と錬金術師を乗せた武装馬車は畸形の森――その中心部に辿り着いた。

森はいつしか、湿った霧に覆われ、一寸先もはっきりとしなかったが、やがて、魔女狩りの馬車と傍らに佇んでいる黒いローブの女を見つけた。

魔力――腐敗のちからは処理の際、魔女たちの怨嗟に呼応して暴走し、魔女狩りの魔女ですら耐え難い濃度まで増すことがある。

そのため、魔除けの護符が無数に縫い込まれた不格好なローブは魔女狩りの証だ。

しかし、異端審問官はローブに魔除けの護符を縫い込んでいることを、魔女狩りの魔女には教えていない。

己の魔力を操ることを覚えたくらいで魔女狩りの魔女となった女は、自分が魔女の中でも特別な存在だと過信していた。だからこそ、同胞であるはずの魔女を追及することに血道を上げ、無惨に殺し続けている――。

「うぬは、何故……馬車に火を放たぬ？」

被差別者の中の差別者となることで自分だけは違うと思い込むことができる、もっとも矮小にして卑しい魔女を、異端審問官は激しく嫌悪していた。

「魔女たちは既に死んでおるではないか！」

馬車を停めた異端審問官は、魔女狩りの魔女に向かって叫んだが、その身体はわずかに揺れるだけで振り返る様子はない。

「魔女狩りの魔女よ！　わしの声が聞こえぬのか！」

念のため、右手に金属製の鎚矛を握った異端審問官は、馬車を降りると慎重に女の背後まで歩いた。そして、疼く角を左手で押しえつつ、怒気を孕んだ声で訊いた。

「……いや、何者なのだ……うぬは！」

魔女狩りの魔女ではないと指摘された魔女狩りの魔女は、その推測をひどく面白がったのか――肩を震わせつつ笑うと、組み分け帽子のかぶりを直しながら振り向いた。

「……呼んだの？　そして、見抜いちゃったの？」

奇妙な響きを伴う早口で呟き、高らかに笑った女の瞳は、青く光っていた。

次の瞬間――異端審問官の左側頭部はあっけなく砕け散った。熟れた柘榴の実が裂けるように。

魔女狩りの魔女が振り返るよりも早く、異端審問官は鎚矛を振り上げていた。

だが、瞬きよりも早く、魔女狩りの魔女の双眼より放たれた魔力は網膜を介して脳髄へと潜り込み、「最終命令、自爆せよ」などと甘美に囁いて、自壊への行程を完了していた。

自壊の瞬間――その目に映った魔女狩りの魔女の瞳は、ほんの少し前、彼女と対峙していた裏切りの魔女の瞳であった。

裏切りの魔女の胎内に潜んでいた六人目の魔女は瞬くよりも速く、魔女狩りの魔女の脳髄に転移し、支配していた。

それは、怨念だけの存在――不可視の亡霊によく似ていたが、潜り込んだ脳の情報処理能力を限りなく加速し、支配と自壊のどちらかへと導く六人目の魔女そのものであった！

胞子に乗って移動する微少な病原体よりもはるかに高速で兇悪な魔力の塊――情報思念体であった！

「だって、あんな未成熟な肉体じゃ、交われないでしょう？　次の魔女――七人目の魔女を孕めないでしょう？」

魔女狩りの魔女の脳髄へと潜り込み、その肉体を支配した六人目の魔女は退屈そうに微笑みながら、動かなくなった小さな魔女の身体を一瞥すると、膝から崩れ落ちるように倒れた異端審問官の長く鋭い角に指を絡めていく。

脳の半分を破壊された肉体は制御を失い、振り上げた鎚矛も落としていたが――それでも、まだ生きていた。

割れた頭蓋骨の奥で、黒く艶光りする節足をいくつも生やした甲虫と赤黒い腫瘍が混淆した異形が、破壊された脳部位の代わりにうじゃりうじゃりと蠢いていたからだ。

だから、長く鋭い角に舌を這わせて刺激を与えれば、下半身の柔らかい角へ血液が流れ込み、激しく屹立する――。

同時に、腫瘍の中に青くぎょろりと光る眼球がひとつ、形成されていた。与えた代償なのか、ローブを脱いだ魔女狩りの魔女の片眼は光を失っていた。

ふたつの青い眼球が互いに呼応することで、ふたつの成熟した肉体は無駄のない滑ら

かな動作で性交をはじめていた。

さて、錬金術師はこの時、何をしていたのか？

答えは——何もしなかった。いや、何もできなかった。異端審問官の手で牢獄から連れ出された時点で、拷問吏の手でとっくに両足と性器を切り落とされ、蛆虫のように這いずり回るだけの不慮者へ墮していたからだ。

しかし、その目は爛々と、異端審問官の屍体と激しく交わっている魔女の姿を見つめていた。

「興味深い！ 実に興味深いなァ！ 私はもっとお前たちのことが知りたいぞ！ 魔力の正体を知りたいぞ！ なのに……私は！」

馬車の中をささやかに這い回るだけの不慮と化した我が身を嘆く錬金術師の視界に映ったのは、小さな魔女の姿であった。

脳髄に潜り込んだ魔女の命令は神経毒のような効果を示し、全身麻痺で即死へと至らしめるはずだったが、幸か不幸か——魔力を孕んでいた魔女には、その上位存在である六人目の魔女への耐性があった。

よって、小さな魔女の生存本能は命令に抗い、涙、鼻水、涎、糞尿——ありとあらゆる分泌物を必死の形相で垂れ流しながら、わずかに呼吸を続け、生き延びていた。

「世界を変える魔力よ！ 微少にして魅惑の病原体よ！ 空気感染くらいでは、私の脳髄はぴくりとも満足せんぞ！」

高らかに叫んだ錬金術師は勢い余って馬車から転げ落ちたが、そのまま、魔女狩りの馬車へ向かって器用に這いずっていく。

空気中の魔力はどんどん濃度を高めているのか——鉄檻すら急速に錆びて瓦解しつつあった。

だから、眼前まで這い寄ると自重を支えきれずあっけなく自壊したのだが、転げ落ちた魔女たちの屍体は生前の姿を失い、どれもこれも菌糸にまみれた粘菌の塊と化していた。

唯一、菌糸に蝕まれていない小さな魔女の身体を抱き起こした錬金術師は瞳孔を覗き込み、両眼の著しい縮瞳を確認すると、迷うことなく衣服を剥ぎ取った。剥き出しの白い肌は血の気がなく、平坦な胸の突起すら色を失っていた。

もともと、不慮と化した肉体は未成熟な女体に欲情することもなく、牢獄から持ち出していた扁平な柄のナイフを手早く取り出すと、垂れ流した糞尿で濡れそぼっている小孔へと突き立て、一直線に臍のあたりまで切り裂いていった。

鋭く光る金属製の陵辱に対して、処女と推測される小さな魔女の叫びはひとつの単語

にすらならなかった。大量の鮮血が噴き出すと同時に全身が硬直し、ついに呼吸を止めたからだ、錬金術の研究と称して無数の屍体を切り刻んできた錬金術師は破壊された人体が完全に死へと至るまでの時間を熟知していた。

錬金術師は慣れた手つきで臓腑を掻き分け、幼く柔らかい肉襞の器官を摘み出す。

そして、互いに激しく腰を振り立てている魔女狩りの魔女と異端審問官の屍体を横目で忌々しげに一瞥すると、軽く放り込むように、血まみれの小さな肉袋——子宮を口に含んだ。

「私には、もっと純度の高い魔力が必要なのだ！ 魔女の胎内……その柔らかい粘膜に巣くっている魔力がなァ！」

ほんの少しだけ、歯と舌でくちやくちやくと柔らかさを愉しみ、喉を鳴らして呑み込んだ。

すると、脊椎がぐにやりと回転し、強引に引き延ばされつつ、ぐるぐるとねじ曲げられた。螺旋でも作るかのように。

否、それ自体は錯覚に過ぎなかったが、次の一瞬——錬金術師の意識は、遠い空から自分自身を見下ろしている映像を視ていた。

辛うじて感覚だけが残っていた、あるはずのない両手を自分自身へ伸ばすと、何者かに首根っこを掴まれたかのように遠ざかり、視点は青い球体と漆黒の空間から、発光する塵芥で形作られた巨大な雲の彼方へと突き抜けていった。

「これは、魔の世界か？ いや、星々の彼方——虚空の果てか！」

錬金術師の意識は、宇宙の果てで蠢いている有象無象を見ていた。そこには、無量大数の微小生物が無限の闇の中に煌めく流れを形成していた。

「なんと奇怪な……魔女の子宮が無限の宇宙と繋がっていたとは！」

錬金術師は呑み込んだはずの小さな魔女の子宮に意識だけを切り離され、吸い込まれた。

だが、矮小なる精虫のように子宮を潜り抜けた果てにあったのは宇宙の真理であった。

「宇宙からの来訪者によって進化した胎児が、魔女となる……だと……」

「これほどの真理と比べれば、私の仮説など、異端ですらない！」

生命の神秘か——それとも、邪悪な本能か？

種の進化が臨界点に達した時、人間の子宮は極限の魔界——無限の宇宙と繋がったのだ。

そして、無限に広がる空間に漂いつつ、思考を巡らせていた錬金術師の意識に囁きか

けてくるものがあった。

「果ての果てより流れ込む魔力の影響で進化した胎児が魔女となり、更に淫らに孕むことで、次の世代の魔女を生む……」

「魔女が男と交わって生まれた魔女こそが、種の臨界点を超える可能性となるなら……」

錬金術師の眩きは、錬金術師の意識が対峙していた宇宙の真理——そのものであった。

「これから生まれる七人目の魔女が、第七期人類……これまでの種の臨界点を超えた超人となれば……」

「これまでの環境はすべて書き換えられ、新しい世界へと改変されるだろう！」

普通の間では知り得ることがないはずの真理が、宇宙の果てから小さな魔女の子宮を通して、錬金術師の脳髓へと流れ込んでくる。

「そうか！　そういうことだったのか！　私はこのために生まれてきた！」

錬金術師の震える唇からは尽きることなく歓喜の声が溢れ出していたが、畸形の森を這いずり回る不慮者の肉体はとっくに、臓腑から溢れ出した無量大数の微小生物に喰らい尽くされていた。

歓喜の声が断末魔の叫びと成り果てると同時に、異端審問官の屍体は激しく射精し、魔女狩りの魔女の胎内へと注ぎ込まれた。

魔女狩りの魔女——六人目の魔女が屍体に残っていたすべての精を搾り取り、蕩けるような表情を浮かべると、腫瘍の青い眼球はあっという間に腐って落ちた。

たっぷりと溜め込んだ下腹部を撫で、再び、ふたつの青い眼球で遠くを見ると、山々の彼方はすべて茜色に染まっていた。

世界の終わり——否、新しい世界のはじまりであった。

そして、再び、囀るように歌い出した。孕んだばかりの七人目の魔女を祝福する、淫らで忌まわしいあの歌を。

これまでの人間たちの歌とはまったく異なる囀りを。

六人目の魔女だよ

<http://p.booklog.jp/book/64472>

企画者：日日日

著者：[日日日](#)、[冬木冬樹](#)、[むらさきゆきや](#)、[土屋つかさ](#)、[ゆずはらとしゆき](#)

編者：ゆずはらとしゆき

編者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuz4/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64472>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64472>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ